半田知雄　画文集

ブラジル移民の生活

（文庫編集部注・文章の内容は「ブラジル移民の生活と歴史」にほぼ拠っているので、画のみを収録しました）

コーヒー採取　もぎとり

コーヒー採取・もぎとり　コーヒー樹の小枝についた赤い実を、親指と人指し指の間にはさみ、手のひらでこきおとす。高いところは三脚の梯子をつかう。(30号)

コーヒー採取・かきあつめ

コーヒー採取・かきあつめ　熊手の一種で地上に落ちたコーヒーの実をかきあつめること。ただし、樹下に布を敷いてこきおとしたところでは、さきに、布の上のものをよせあつめ、遠方に散ったものだけ熊手でかきあつめる。(100号)

コーヒー採取・ふるいわけ

コーヒー採取・積み出し

コーヒー採取・積み出し　100リットルのジュートの袋に入れて口をしばり、道路のふちに積んでおく。これを農場の馬車が乾燥場へはこぶのである。この時、たとえば、42号家族が2袋、と監督は手帳に記入していく。これが移住地の自営農では監督はいないし、コーヒーは自分の車で自家用乾燥場へはこぶわけである。(12号)

開拓地 初年目の住居

海岸山脈のタピライー移住地。茶の栽培が目的だった。

開拓地初年目の住居　「海岸山脈」のつづきで南方へのびている「パラナピアカーバ山脈」中に出来た茶の栽培地のタピライー移住地である。サンパウロ西から150キロメートル程のところなので、奥地とは少し違った風景である。1960年前後、原始林としては最後にひらけたところである。

コーヒー園の夕焼け

次頁 説明あり

コーヒー園の夕やけ　立ちならんでいる枯れ木は、原始林伐採のとき、切りにくいために残したかたい木で、(そのわけは、ヤマキリの請負人たちがかたい木を切っていたのでは日数がかかりすぎて儲けにならないので、切り残す場合が多い。一町歩いくらで請負うのであるから)また、さきの方が黒こげになって枝の出ていない木はおそらく、もとからの枯れ木で、斧の刃もたたないような固い木であろう。初期日本人移住地が6、7年目には、こんな広いコーヒー園になっていた。むろん数家族の所有地であるが、今はみられない夢のような風景である。(15号)

帰り道　一日の仕事を終えて、三々五々、家路をたどる。丸太ん棒をかついでいるのは、家へ帰ってから、割って薪にするためである。数年間くさらずにコーヒー園に残っているかたい木ほど、火力が強いので、よろこばれる。雨期にそなえるにもよい。大農場時代の生活風景である。（30号）

アラヤマの蒔き付け

次頁 説明

前頁

次頁

アラ・ヤマの播きつけ　これは筆者が少年時代、アラ・ヤマで綿の種子をまいているところ。さきの方に幅20センチ位の金具のついている棒を土にさしこんで穴をあけ、そこへ綿の種子4、5粒を投げこんで棒をひきぬき、そのあとを棒のさきで1、2度突っついておく。どんなに木の根や棒きれのちらばっているところでも、この一番原始的な播種法によれば、播きつけは容易である。これは、こんな種類の絵を描きはじめて最初の構図である。(150号)

ヤマ伐り　ヤマ伐りはフォイセ(柄の長い鉈)、トランサ(二人で押したり引いたりするノコギリ)、マッシャード(斧)等で作業する。あらかじめどの方向へ倒れるかを見きわめてから伐りにかかる。この木は左側に倒れることが、左端の人物の手の振り方によって暗示されている。(15号)

ヤマ伐り

説明 前頁

馬子たちの休息

説明 次頁

馬子たちの休憩　ラバを５頭10頭とつらねてヤマ道を行く馬子たちは、おもに山岳地帯の運搬業者であった。
第二次大戦中は、木炭車が走ったおかげで炭やきが盛んになり、この馬子(トロッペイロ)たちが山を登り下りする姿が見られた。アスファルト道路が発達した現在ではもう見られない。(15号)

親と子の肖像　父親が手に支えているのは、長い柄のついた鉈、フォイセである。子供の手の組み合せ方は、縄タバコを両手でほぐしているところを示す。小屋はヤシの割木とヤシの葉ぶきで、木の切り株は立派な腰掛けである。水は谷の方へおりて行って汲んでくる。（30号）

新開地の独身青年

次頁 説明

前頁

次頁

新開地の独身青年　窓の下にはバナナの房が下がり、その前方にはモランガと称するひらたいカボチャがある。にわとりがさわいでいるのはトカゲが出て来たからである。どうやら青年は詩でも書いているらしい。(12号)

尺八葬送　新開地のお葬式である。尺八の上手な人が亡くなったので、同好者の人たちが尺八をふきながら野辺送りをした。(30号)

尺八葬送

説明 前頁

待ち合せ場所　森林と開拓地の境目あたりに、目標となる木立ちがある。ここに集合して、これから長い旅に出ようとする開拓者たちである。（15号）

蒔きつけどき

説明　次頁

播きつけどき　サンパウロ州の播きつけどきは、春9月頃からである。穴を掘っている男、種子を播いている女、ひと休みしている子もち女、赤ん坊を見ている亭主。種子播きどきの風景。(12号)

水汲み　コーヒー乾燥場の一角にある水タンクから女たちが水を汲んで行く。20リットルの石油の空罐になみなみと水を入れ、これを頭にのせて運んで行くのである。女の子は水さしに入れて運ぶがやはり頭にのせて行くだろう。今でも見られる田園風景。（30号）

おしゃべり　道で会った二人の女。ふりわけにした袋の中の一方にはコーヒーのビンがのぞいているが、前の方には何か食べものがはいっているのだろう。ここではエンシャーダと称する鍬の形を観てもらいたい。立ったまま除草するのに適したような具合に作られている。エンシャーダは労働力のシンボルで、エンシャーダ二挺と言えば、働き手二人ということであった。（30号）

食後の休憩

説明　次頁

食後の休憩　まだ炭が附着している横木がいい腰掛けである。木の肌は開拓２、３年後でも黒こげのままである。(15号)

イネたたき　細い棒を組み合せて長い棚をつくり、これにイネの穂さきをたたきつける。むろん地上には広い布が敷いてあり、前方には束ねた藁が掛っている。ブラジルの陸稲は、モミが放れやすいので、こうして、どんどん収穫がはかどる。

イネたたき

説明　前頁

アマゾンの労働者　日本人胡椒（こしょう）村の労働者たち。カゴを首に掛け、物を運ぶのが特徴。カゴの紐を額に掛けることもある。（30号）

上塚周平宅

説明　次頁

上塚周平宅とエンピーラの花　上塚氏は第一回笠戸丸移民を引率してブラジルへ渡った人。移民の父と親しまれ、有名な上塚植民地の創設者でもある。屋根の上方に咲いているのは、エンピーラとよぶ繊維植物で、下の方の長い葉の植物はサイザル麻である。白壁の部分は母屋、右端にわずかのぞいているのが開拓当時の小屋であるが、今はおそらくどれも存在しないだろう。この絵は1937年上塚氏の歿後１ヵ月ほどしてから、描いたものである。(15号)

モミのふきわけ　乾燥場のヤグラの上に乗って、ゴミ、シイナ、とモミを高所から落して、風で吹きわけている。モミは袋につめて倉庫へ運ぶ。(12号)

モミのふきわけ　説明　前頁

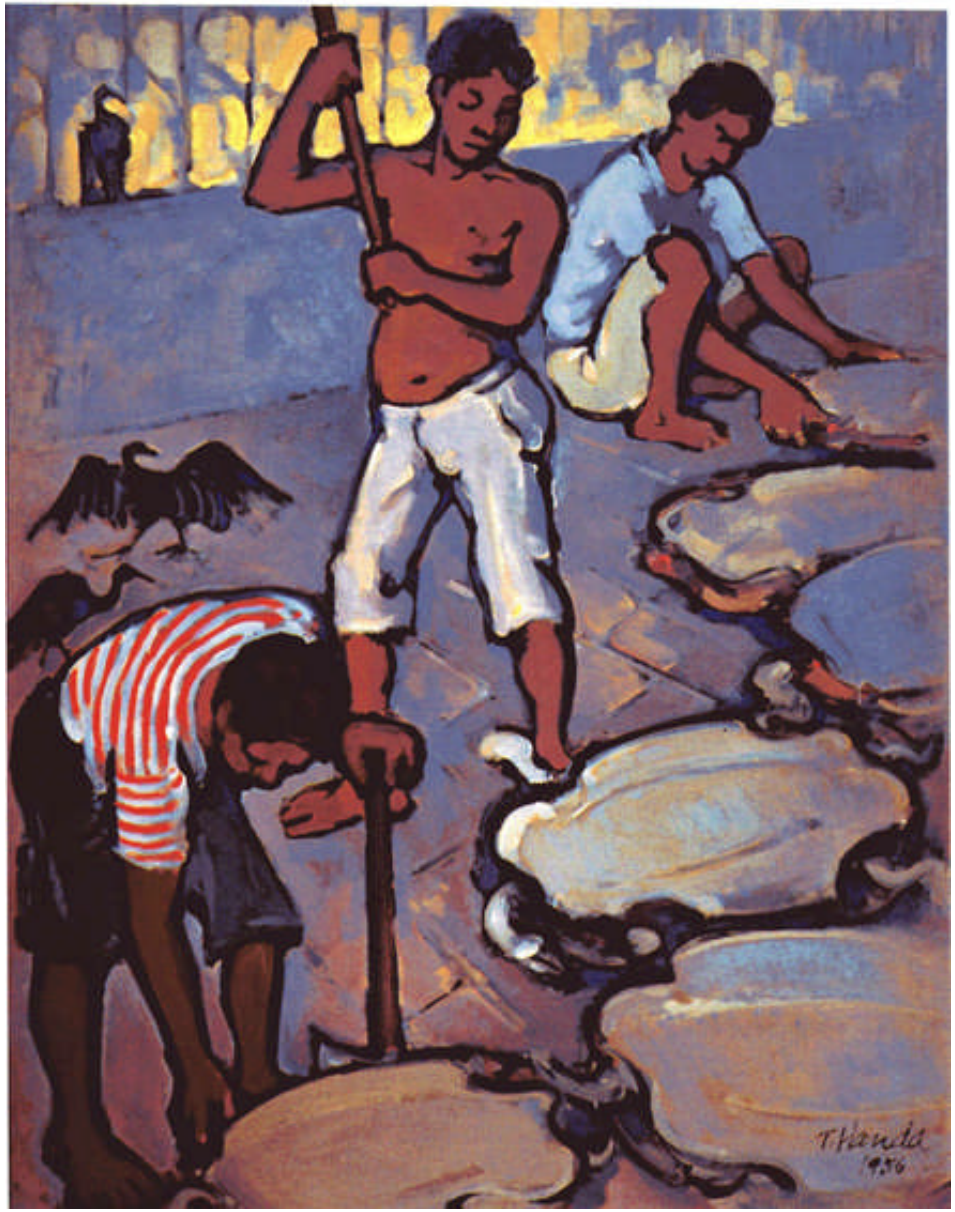
引っ越し　説明　次頁

引っ越し　これはブラジル人貧農の引っ越しの光景をえがいたもの。われわれも、かつては契約労働者として大農場へはいったとき、その労役にたえられず夜逃げしたときは同じような光景だったろう。彼らの生活の象徴はヴィオロン（ギター）である。(30号)

奥地の野菜づくり　これはサンパウロ近郊農法の奥地侵入といわれたもの。昔は野菜づくりは近郊農家の専業であった。ところが、アスファルト道路が発達すると、奥地から時期はずれの青物を送りだすことになる。(20号)

奥地の野菜づくり　説明　前頁

銛（モリ）打ち　小舟に乗って大魚を獲りに行く人々。子供たちは櫂をとり父親はモリを手に「浮き島」の方へ舟をやる。浮き島の牧草をたべるために牛魚もあらわれるが、主としてピラルクーと称する大魚をねらうためである。ピラルクーはアマゾンの鱈とも言われ、生干しにしたものが美味である。ある日本人は二、三年前、長さ二五〇センチ、重量二〇〇キロの大魚を釣りあげたことがあり、写真とともに新聞に報道された。モリには細糸がからみついているので竿さきから離れて魚とともにのびて行く。いよいよ紐がつきたら、竿を手から離す。竿は浮きになって流れるので、これを舟で追うのである。（30号）



アマゾンの大亀　今は禁猟になっているが、かつては、州首府マナウスの市場のテラッスでは、こうした亀の屠殺風景が見られた。亀はひっくりかえしておけば移動できない。先ず首を切り、血をとり、次には横っ腹から、背と腹を二つに別け、これをこまかく料理する人の方へわたす。血の料理が第一の御馳走なのである。ウルブーという真黒な禿鷹が肉の切れはしでもぬすみとろうとして横からのぞいている。（30号）

聖ヨハネ祭り　六月は祭りの多い月。十三日は聖アントニオ、日本なら出雲の神様の祭日。二十四日は聖ヨハネ祭。もとは主としてポルトガル人が祝った。ヨーロッパでは春、ブラジルでは冬の祭りとなる。二十九日は聖ペテロ祭。天国の鍵をあづかっているえらい聖人で、雨の神様でもある。だが、どの聖人のお祭りでも焚火とアコーデオンはつきもの。昔はパロンをあげた。（25号）

冬祭りとバロンあげ　人間の大きさとくらべて、紙でつくった風船の大きさも、ほぼ想像されるだろう。今、そのバロンに火をつけているところ。蠟か石油を染みらせたボロキレのかたまりを、細い輪型の針金の口に十字に渡したまん中にしばりつけ、その煙で風船の内部を満たす。ささげもった人間が、手を離しても地上へ落ちなくなったら、みんな一斉にバロンから手を離す。とバロンは一直線に空へ昇って行く。みんなヴィヴァー（万才）と歓呼する。（30号）

風船を追う子供たち

説明　次頁

風船を追う子供たち　冬祭り(六月ごろ)バロンを追いかける子供たち。ラバがおどろいて跳ねだす。(12号)

若き日の中尾熊喜氏　中尾さんはサンパウロ人文科学研究所の恩人としてわすれられない実業家である。若き日、おそらく独身時代、サンパウロ郊外のコチア方面で、こうしてジャガイモ栽培にはげんでいたのである。むろん自炊生活であった。(8号)

中尾熊喜　説明　前頁

日曜日の午後

説明　次頁

日曜日の午後　家の前に家族の者が集まってギターを楽しむ(20号)

薪とり　あとかたづけの仕事の一部であるが、ここには女の仕事として薪集めを描いてみた。大都会近くの休耕地や再生林の開拓であるが、薪は1メートル立方いくらで取り引きされる。(20号)

薪とり

説明　前頁

敬老会

説明　次頁

敬老会　どこの移住地でも、また近頃は都会でも、敬老会が盛んである。2世・3世が成長した印(しるし)である。ここに描いたのは昔の移住地の敬老会である。(30号)

牧場内の洗濯場　洗濯物を、干したり、草の上にさらしたり。いずこも同じ井戸端会議場のにぎわいである。(30号)

牧場内の洗濯場　説明　前頁

旧サルゼーダス伯爵邸　説明　次頁

旧サルゼーダス伯爵邸　サンパウロ市の初期移民たちは、この辺に屯して、朝晩この「お城」を見あげながら仕事にでかけ、また家へ帰った。サンパウロ市の古い住民たちにとってはなつかしいお城である。(15号)

画文集
ブラジル移民の生活
定価 5/50円（本体5000円）

一九八六年二月一日　初版発行
著者　半田知雄
発行者　安倍甲
印刷　藤庄印刷株式会社
製本　株式会社中山製本
発行所　無明舎出版
〒010　秋田市広面字川崎112の1　☎0188・32・5680　振替 秋田七―四四八七

© Tomoo Handa　Printed in Japan

※落丁、乱丁本はお取替えいたします。